



Title	中国ムスリム知識人による政治参加の試み：馬堅の毛沢東時代の政権協力とその蹉跌を例に
Author(s)	洪, 砺
Citation	アジア太平洋論叢. 2024, 26(1), p. 47-64
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95109
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中国ムスリム知識人による政治参加の試み —馬堅の毛沢東時代の政権協力とその蹉跌を例に—

Political Participation of Chinese Muslim Intellectuals A Case Study of Ma Jian's Experiences During the Mao Era

洪 砺*
HONG Li

Abstract

A considerable amount of high-quality research on the political participation of Chinese Muslim Intellectuals has been conducted. However, such research primarily focuses on the Republican era or the era after the adoption of Reform and opening-up policy. The MAO Zedong era, during which Chinese Muslim Intellectuals began to assume leadership over the entire Chinese Muslim community through regime cooperation, remains insufficiently discussed. MA Jian, who represents a milestone in Chinese Islamic education, can serve as a valuable focal point for addressing the issue. However, the existing literature concerning MA Jian tends to be retrospective and lacks scholarly analysis. Furthermore, certain historical facts are concealed by these texts to maintain a favorable image of MA Jian. Additionally, due to the requirement to conform to the official views and values of the regime, these texts lose objectivity. This article aims to examine the Mao era of Ma Jian by utilizing his writings, biographical sources, and other relevant materials to depict the circumstances of the Hui intellectuals who remained in Beijing during that time. Through this examination, a reevaluation of the strategy of regime cooperation adopted by Chinese Muslim Intellectuals will be pursued.

Keywords: Political Participation, MA Jian, the Mao Era

I はじめに

20 世紀初頭、マイノリティとしての中国ムスリム知識人の一部は、社会ダーウィン主義及びナショナリズムが蔓延している中国社会において生き残るために、エスニシティー改造とイスラーム改革の道を選んだ。松本（2003）によれば、彼らによって出された処方箋は次の通りである。第一に、時代に相応しい指導者を育成するために、イスラームと西欧近代主義を同時に教える教育機関を設立する。第二に、クルアーンの翻訳を通じて、信者によるクルアーンに対する理解を促し、中国イスラーム衰退を阻止する。第三に、愛国主義をイスラームの教義と解釈し、「回」を国民思想と国民意識に統合する。この処方箋にしたがい、民国初期以来様々なムスリム組織・団体が設立され、教育振興、社会救済、職業訓練などが行われた（矢久保 2022）。また、ムスリムを国民思想と国民意識に統合し、漢人社会から抑圧されている状況を改善して政治的・社会地位を向上するために、ムスリム知識人は政治に関して発信し、政治活動にも積極的に参加した。

こうした中国ムスリム知識人による政治参加に関する先行研究の関心は、主に民国期あるいは改革開放以降に焦点を当てている（澤井 2011; 矢久保 2015, 2022; Matsumoto 2002, 2006）。

* 大阪大学大学院言語文化研究科・博士後期課程

だが一部のムスリム知識人が御用文人となり、政権協力を通じて中国ムスリムの全体を指導し始めた毛沢東時代(1949~1978)^①は十分に議論されていない。中国ムスリム知識人の代表的存在である馬堅はこの時代について議論するための良い着目点と言える。しかし、沙 (1985)、李振中 (2000) 及び馬志学 (2019) など、馬堅にまつわる文章は大抵回顧にとどまっており、学術的な検討が不足している。さらに馬堅のイメージを良好に保つため、また政権の公式見解・価値観に従わせるために、一部の史実が隠蔽されている。

本論は、近代中国ムスリム知識人の代表的存在であり、政権によって模範と認められ、一部の回族^②によって御用学者と見做された、北京に住んだ馬堅の毛沢東時代に焦点を当て、彼の文章、伝記などの資料を用いて、北京に残った回族知識人の毛沢東時代境遇を描く試みである。それによって、ムスリム知識人の一部が採用した政権協力という戦略を再考することにする。

II 馬堅の生い立ち

1906 年 6 月 6 日、馬堅は雲南省蒙自県沙甸村の敬虔な回族家庭に生まれた。小学校時代に課外時間を使い、アホン^③の馬明福と王誠一からアラビア語及びクルアーンを学び、清朝秀才の国文先生から漢文を勉強した。そこまで馬堅が受けていたのは中国ムスリム知識人が伝統的に受けてきた教授法による教育であったが、1920 年からは近代的に整備されたイスラーム新式教育を受け始めた。1920 年、馬堅は新式教科書で授業を行う私塾で勉強し、1921 年、雲南回教高等経書並授学校に入学した。科目には、旧教育が重要視しているクルアーンやアラビア語などのイスラーム知識のほか、現代中国語や自然科学などの授業も含まれた。1922 年から 1925 年まで、馬堅は成徳中学校で、国文、歴史、数学、物理、化学及び英語などを学んだ。その後、イスラーム哲学の研究を目的として北京大学に進学を希望したが、経済状況のため進学を断念した。1926 年から 1928 年まで魚峰小学校で校務主任を務めた。学生の回顧によれば、教員としての馬堅は西洋科学知識と愛国主義の教育を重視していた(馬美忠・王春福 1986)。その後、1928 年から 1931 年まで上海伊斯蘭師範学校でイスラーム知識、アラビア語、ペルシア語、英語、数学、哲学などの授業を受けた。1931 年から 1939 年まで、雲南回教俱進会によって派遣され、エジプトのカイロにあるアズハル大学及びダール・ウルーム学院に留学した。帰国後、1939 年から 1946 年まで、上海、重慶、雲南を転々とし、クルアーンを翻訳しながらイスラーム教育事業に従事していた。1946 年、向達と白寿彝の推薦を受け、教授として北京大学の東洋語専攻(東方語文学系)に招かれた。1949 年、国民政府が台湾に移転した時も、馬堅は北平(北京)に残ることを決めた。



図1 1932年エジプト留学中の馬堅(左上2人目)
(中国イスラム協会公式サイトより)

III 中共の御用学者へ転身した馬堅 (1949~1956 年)

1. 「民族平等」を謳う新政権の擁護及びイスラームの革命化

馬堅の妻の回顧によれば、1939 年馬堅が帰国した後、国民党政府の官僚が馬堅に政府の仕事を提供し、彼を重慶へと誘ったことが数回あるが、馬堅はこの誘いを断っていた(沙 1985: 26-27; 李振中 2000: 119)。しかし、1949 年に入ってから、馬堅は政治活動へ積極的に参加し、中

国共産党（以下：中共）による政策をイスラーム的に正当化する役割を果たしてきた。この変化は中共の政策と繋がっていると思われる。1946 年、山東省の対回族工作に従事していた劉格平は報告書で次のように述べている。

我々は彼ら〔アホンと封建勢力、「進歩的」なアホンと保守的なアホン〕の間の対立を利用し、封建勢力を孤立させるべきである。（括弧内、引用者、以下同じ）

また、1949 年 8 月の中国人民解放軍第一野の指導部は臨夏の対回族工作に関して次のように指示している。

（前略）アホン及び回民（ママ）知識人の支持を真剣に得ようとすべきである。これは対回民（ママ）工作の最も重要な条件である。

要するに、このとき中共は回族知識人の支持を得ることを回族全体の支持を得ることの必要性を認識している。また、回族知識人らの間の対立を利用するという策も考慮に入れていた。一方馬堅は、愛国主義を揚げながら他の教派を批判する改革派ムスリム知識人に属し、国民党政権との連携も緊密ではなかった。また、イスラーム思想家の著作の翻訳を通じて、馬堅は回族民衆ないしムスリム全体において有名であった。さらに、彼は名門大学の北京大学の教授を務めていた。政権にとって、政治経験が浅く、かつ有名な馬堅はまさしく利用できる「進歩的」な回族知識人であった。

1949 年 9 月、中国人民政治協商会議（以下：全国政協）第 1 回全体会議^④が北平で開催された。馬堅は「宗教界民主人士」の代表としてこの会議に参加した。この会議で、中国西南部の雲南出身の馬堅と中国中部の河南出身の白寿彝は西北回族を代表して毛沢東と朱徳に「毛主席：中国人民の指導者」（毛主席中国人民的舵師）と「朱総司令官：中国人民の命の恩人」



図 2 旗を献上している馬堅（左）と白寿彝（右）
（中国イスラム協会公式サイトより）

（朱総司令官中国人民的救星）と中国語とアラビア語で書かれた 2 枚の旗を献上した。1950 年 6 月、全国政協第 1 期第 2 回会議が催された。1926 年以来、約 20 年にわたって回族の民族教育（すなわち、イスラーム教育）を重視していた馬堅は、遂に国の力を借り、回族の民族教育を推進する機会を得たと考え、この会議で第 15 号提案と第 30 号提案を提案した。第 15 号提案は、政府が早速に少数民族を援助し、彼らの文化教育事業を発展させるべきである、と助言している（馬堅 1950d）。第 30 号提案は、政府は回民（ママ）の学校が回民（ママ）文化常識に関する科目を開

設することを許すべきである、と勧めている（馬堅・呉 1950）。また、新政権に対して警告を発するために、馬堅は国民党政権を批判し次のように述べている。

反動的な国民党の教育部署は、〔民族〕関連科目の開設が大漢族主義と民族同化政策に違反していると考えていたので、一般科目の他に特殊科目〔すなわち、民族関連科目〕の開設に反対した。彼らの行為は回民（ママ）の不満を買った。この例は参考になる（馬堅・呉 1950）。

授業の内容について、馬堅は次のように提案している。

授業の内容を、クルアーンとイスラームにおける革命性に関して積極的な部分を教えるものにするべきである。回教（ママ）の教義及び律法をマルクス・レーニン主義及び毛沢東思想と巧妙に結合しよう。また、中国回民（ママ）の歴史も必要である。彼らの解放は全国の各民族の解放と関わっており、個別の解放は不可能だということを回民（ママ）に理解させるべきである（馬堅・呉 1950）。

旗を献上する行為は政権擁護の立場を表している。ただし、馬堅の提案をみれば、この擁護は無条件のものではない。馬堅は特殊科目でイスラームの教義と律法を教えるべきだと主張している。すなわち、彼の考えによれば、中国がマルクス主義国家になっても、回族に対するイスラーム教育は不可欠である。また、馬堅が敢えて国民党政権の失敗を用いて新政権に対して警告を発したことも、彼が完全に新政権の擁護者になっていないことを示している。ただし、無神論の新政権に宗教教育を認めさせるために、馬堅は譲歩した。「クルアーンとイスラームにおける革命性に関して積極的な部分」という言い方は、中共の革命思想に合致する部分という意味だと考えられる。これは合致する部分もあれば、革命思想に合致しない部分もあるということであり、すなわち、イスラームの一部の内容は中共の革命思想に反していることも示唆している。しかし、彼の主張はイスラーム教育における知識部分にしか言及しておらず、信仰と実践の部分が無視されている。イスラームの基礎知識を知っていたとしても、それを信じていなければ、実践しなければ、ムスリムとは言えない。すなわち、馬堅の主張には、ムスリム育成のためには不十分であった。

回族の馬堅にとって、宗教に基づく要求はもちろんのこと、新政権を擁護する交換条件として、「民族平等」及び「信教自由」は欠かせなかった。1950年7月16日、馬堅は新聞の『進歩日報』で「新時代に対して回民同胞のあるべき姿」（回民同胞對於新時代应有的認識）と題する文章を発表した。この文章で馬堅は次のように論じている。

「共同綱領」^⑤は国内の各民族が平等であることを認めており、お互いが協力することを促し、差別と弾圧に反対している。少数民族の集住地域において、区域自治を行い、彼らは代表を選出し、自分たちを代表して政権に参加する。少数民族は国の軍事制度に従い、人民解放軍組織及び警察組織に参加する。少数民族は自分の慣習と宗教を発展させ改革する自由を有する。人民政府は少数民族を援助し、政治・経済・文化などの事業を発展させるべきである。我ら〔少数民族〕の祖先は自由と平等の権利を得るために闘争して犠牲になった。中国人民の革命は、中国共産党による正しい指導の下に成功を取めた。彼らの夢は叶った。我々は毛沢東の旗の下に個々の兄弟民族と協力し、我らの新たな国を建設し、歴史が我らに与えた光栄な任務を完成すべきである。「共同綱領」は中華人民共和国の大憲章であり、それに書かれている全ての内容に従わなければならない（後略）（馬堅 1950a）。

馬堅によれば、中共の正しい指導の下に成功した革命は、少数民族の祖先が犠牲になりながら追求してきた自由と平等の権利を少数民族に保障しなければならない。回族は毛沢東の旗の下に新たな国を建設すべきである。また、回族が昔から追求していた権利を回族に与えた「共同綱領」は憲法の役割を果たしているため、回族は「共同綱領」の全てに従わねばならない。

こうして馬堅は回族民衆に新政権の政策を擁護しようと呼びかけている一方で、新政権による民族と宗教に関する言説を完全に受容したわけではなかった。日中戦争初期、中共は回族と

モンゴル族を始めとする少数民族を結束させ、一致して日本軍に抵抗するようにさせるために、民族問題を重要視し始め、研究グループを設立した。1941 年、研究成果としての『回回民族問題』が出版された。この本は中共の回族に対する政策の基盤であったと考えられている（松本 1999: 259-263; 王伏平 2001）。『回回民族問題』は回族を一つの民族として認め、彼らは大漢民族主義が蔓延していた中国社会において差別されたと論述している。しかし、この本はイスラームと預言者ムハンマドに関して次のようにも述べている。

発展の段階の違いによって、イスラームの内容は変化してきた。イスラームを代表する階級も変化しつつある。抑圧を受ける階級から抑圧を与える階級になり、搾取される階級から搾取する階級になった。ムハンマドは富裕層と貧困層の間における利益の調和及び奴隷の身請けを主張し、科学と芸術の発展を呼びかけたが、最終的に大アラブ帝国の統治者になった（民族問題研究会 1980: 52）。

上述した内容によれば、抑圧され搾取された階級を代表した預言者ムハンマドは、イスラームを利用し、マッカ政権を倒した後に、民衆を搾取して抑圧する帝国統治者になったということになる。これに対し、馬堅はムハンマドを革命者として宣伝した。1949 年 7 月 7 日、北京の回族が催した盧溝橋事件記念会で馬堅は講演をした。この講演において、馬堅は、ムハンマドは「アラブ人の迷信を打破しアラブ政治、経済及び社会制度を改革しようとする」革命者として解釈している（馬堅 1949）。また、馬堅（1949）は、「搾取された貧乏人」、「抑圧された奴隷」及び「熱意を抱く青年男女」がムハンマドを信じ、彼を擁護してきていると述べている。対照的に「豪族」と「悪人」によって構成される「マッカの反動派」（墨克的反動派）は「各種の悪辣な手段」を講じてムハンマド、彼の家族及びムスリムたちを迫害した（馬堅 1949）。迫害に直面するムハンマドについて、馬堅は「ムハンマドの革命の意志が非常に固く屈服しなかった」と説明している。さらに、馬堅（1949）はムハンマドとマッカ勢力の闘争及びクルアーンの啓示（22:39-40; 2:190; 2:192-193; 8:61-62; 4:75）を論拠とし、イスラームの戦争は「迫害に反対し自由と平和を求める」戦争だけでなく、「人民を解放する」戦争でもあると解釈している。最後に、彼は「イスラームが迫害と侵略に反対する戦争は神聖な戦争（ジハード）と見なす」ため、「我が国で発生した 8 年間の対日抗戦（日中戦争）及び 3 年間の解放戦争（第二次国共内戦）も神聖な戦争である」という結論を導き出している（馬堅 1949）。

馬堅は「搾取」、「革命の意志」、「反動派」などの中共が頻繁に使う革命用語を用い、イスラームとムハンマドの使命を描き直した。彼の論理に従えば、イスラーム勢力は中共と同じように革命勢力であり、ムハンマドはこの革命勢力の指導者である。また、ムハンマドによって指導されてイスラームが広がったのは、中共によって指導される日中戦争と国共内戦のような侵略と迫害に反対する戦争と同じであった。すなわち、馬堅は『回回民族問題』で批判されているイスラームとムハンマドを、革命党と革命指導者という中共の理論で再構築している。この方法で、『回回民族問題』における批判に対抗したのである。

2. 狭隘な民族主義への批判及び回族内部の団結への努力

1951 年 1 月 10 日、『光明日報』は「しどろもどろになったアンクル・サム」（語無倫次的山姆大叔）と題する記事を掲載した。記者はアメリカを皮肉る際に、「可哀想な人々は、一つの手が剣を持ち、もう一つの手が経典を持つムハンマドは知っているが、一つの手が銃と火砲を持ち、もう一つの手がお金を持ち、また別の手（ママ）が「道義」を持つ悪いアメリカを知ら

ない」と書いている（盧 1951）。預言者ムハンマドを邪悪なアメリカと並べた、この表現は回族の激しい反発を引き起こした。

事態を收拾するために、1月16日、北京市人民政府民政局民族事務課は北京市各界回民代表会議を開催し、そこで『光明日報』の代表は謝罪した。同会議で馬堅はムハンマドが剣を持つ理由について発言した。発言に基づく「ムハンマドの宝剣」（穆罕默德的宝剣）と題する文章は1月19日の『光明日報』に掲載され、20日、『人民日報』に転載され、新華社から全国に向けて広報された。この文章によると、ムハンマドは迫害に反抗するために剣を持ち戦った。また、イスラームは信教の自由を唱える宗教であり、平和な方式で広がっていると説明している（馬堅 1951c）。この文章の目的は、漢族によるイスラームに対する誤解を解消すると同時に、イスラームを信じる民族を団結させ、各民族が一緒に「抗美援朝」^⑥を支持しようと呼びかけることにあった。

同年3月、漢族と回族の間に起こったブタ肉に関する争いを収めるため、馬堅は「なぜ回民（ママ）がブタ肉を食べないか」（回民為什麼不吃猪肉）と題する文章を書いた。3月20日、この文章は『人民日報』に掲載された。馬堅（1951b）によれば、イスラームは衛生の観点からブタ肉を食べることを禁止した。一部の人はブタ肉を食べない回族の幹部や職員に対して「彼らの行為は封建時代の迷信であり、彼らの思想は問題である」と批判していた。このような批判は回族の幹部や職員の不安を煽った。このような言い方は大漢族主義の表現であるとした。続いて、馬堅は一部回族の不勉強も次のように批判している。クルアーンはブタ肉を食べることを禁止している。しかし、「ブタ肉」（猪肉）という言葉には問題がない。一部の回民（ママ）は不勉強で、「ブタ」（猪）という漢字を嫌悪し回避している。漢・回雑居の地域において、漢族の人がブタ肉を持っていたとしても隠さなければ殴られる。このような行為はイスラームの寛大を尊ぶ精神に違反している。つまり、馬堅にとって、狭隘な民族主義には大漢民族主義だけでなく、回族による他民族への不寛容も含まれている。大漢民族主義であれ、回族の民族主義であれ、両方とも民族紛争の要因である。民族紛争を解決するためには、両方が改善することが必要である。

民族間の団結を呼びかける一方で、馬堅は回族内部の結束も重視している。ムスリムにとって重大な祝日は二つある。一つ目は断食明けの祭であり、二つ目は犠牲祭である。馬堅（1950b）によれば、世界各国のムスリムは同じ日に祭りを祝うが、中国の回民（ママ）は開催日を合わせていない。馬堅はこの不一致が教派間の軋轢によるものだと認識している。この問題を解決するために、彼はイスラーム暦に関する専門本を編訳した。本の中で、馬堅（1955）は軋轢を深める各宗派を批判し、「真理を唯一の基準とし、宗派による偏見をうち破り、回民の結束を実現しよう」と呼びかけている。

3. 兼務通訳官及び兼務外交官を務める馬堅

建国初期、毛沢東をはじめとする中共指導者は、西諸国による閉鎖に対抗するため、アジア・アフリカ諸国との団結を強化しようとする外交政策を打ち出した。その中には、数多のイスラーム国家およびアラブ諸国が含まれる。建国初期の中国においてアラビア語に熟練し運用できる人材は圧倒的に不足していたため、アラビア語の教授の馬堅は翻訳者として大活躍した。1950年、馬堅は毛沢東の『人民民主主義独裁について』（論人民民主專政）をアラビア語に訳した。文献の翻訳の他に、毛や周恩来をはじめとする中国の指導者らの通訳を務めた。馬堅の学生は馬堅の通訳職について次のように回顧している。

馬堅先生は我が国の指導者としての毛沢東と周恩来及び古参の革命家らの通訳を務めたことが数回ある。彼はこのような機会を最大の幸福及び無上の光栄と看做した。彼は通訳の任務を完遂するたびに、興奮しすぎて眠れなくなった。(中略)ある日の会見の後、彼は非常に感動し、私に対して次のように言った。「解放の前、私は宗教の目的だけでアラビア語を使った。今のように、アラビア語を用いて国の指導者の通訳を務めるとは思わなかった。我が国の無産階級のためにアラビア語を使用することこそアラビア語を勉強して使用する崇高な目的だ」(鄔 1981)。

外交通訳を務めるほかに、馬堅は公式立場に立ち、イスラーム国家およびアラブ諸国を支持してアメリカなどの帝国主義勢力に反対することを要旨とする文章も書いた。『人民日報』によって、1951年7月28日で掲載された「イラン人民の英米帝国主義に対する闘争を支持する」(支持イラン人民反対英米帝国主義的闘争)と、同年11月19日で掲載された「帝国主義によるエジプトへの侵略とエジプト人民の抵抗」(帝国主義対埃及的侵略と埃及人民の反抗)は好例として挙げられる。

馬堅はムスリムであり少数民族でもあるため、中国を代表してイスラーム国家およびアラブ諸国との親善を深める外交活動にも頻繁に参加した。1952年10月2日から12日まで、馬堅は中国代表団の成員として、アジア太平洋地域平和会議に出席している。また、馬堅の息子によれば、1950年代において政府は馬堅の名義を使い彼の家で中国を訪問する外国人の賓客を2回招待した(馬志学 2019)。

IV 反右派闘争における馬堅(1957～1965年)

1. 文章の連載中止及び協会の活動停止

1957年4月27日、中共は当時の政治状況に基づき、党内における官僚主義、宗派主義及び主観主義に反対する整風運動を行うことを決定した。5月1日、人民日報はこの指示を掲載し、中共党員の他、党外の人々の参加も歓迎された(中国共産党中央委員会 1957)。整風運動の発展に伴い、中共に対する批判は激しくなったが、このことは、中共の指導に対するブルジョアを代表する右派分子による挑戦と看做された。その結果、同年6月反右派闘争(以下:反右)が始まった。

馬堅は1957年から雑誌の『中国穆斯林』でクルアーン訳注を連載していた。しかし、1958年第4期から連載中止となった。また、回族学者の白寿彝が著したイスラーム学者の伝記も1958年第2期から連載中止となった。イスラーム及びイスラーム学者に関する文章の連載停止は政治環境が招いた結果であると考えられる(李松茂 2009)。また、同年10月、1953年に創立された回族組織の中国回民(ママ)文化協進会は歴史的使命をすでに完了したことでとされ、解散を余儀なくされた(新華社 1958)。

反右は始まってから急速に各領域へ拡大した。少数民族や宗教信仰者も逃れられなかった。上述した現象は、少数民族と宗教信仰者にとって政治状況が悪化し、厳しい状況に置かれるようになったことを示唆している。このような状況において、馬堅は賛否を明らかにせず、後述するように依然として政権に迎合する姿勢を示した。

2. 右派分子の馬震武と傀儡政権への批判

中国各地において、数多くの回族もしくは他民族のムスリムは右派として粛清された。その

中で、最も有名な人物は馬震武である。馬震武は寧夏西吉県沙溝県出身で、中国におけるイスラーム神秘主義教団のジャフリーヤ派の8代目指導者である。ジャフリーヤ派の指導者は大量の土地を持ち、教民に無償労働を宗教的義務として求め、またその指導者は教民によって聖者と見做され、指導者の墓は聖者廟として教民によって参詣されることもあり、崇拜されていた。1949年から、馬震武は甘肅省政府委員や西海固回族自治区人民政府主席などの要職を務めていた。1958年8月、中国イスラーム協会主催の回民（ママ）座談会が寧夏で開催された。この会議において、馬震武は右派分子と認定され、厳しい批判を受け、懲戒免職とされた。

『人民日報』の記事によれば、馬震武は自分の宗教指導者としてのアイデンティティを利用し、封建特権を維持して拡大するために、民衆を殺害した（康 1958）。また、馬震武は国民党反動派と結託し反革命反乱を起こしたと言われた。さらに、記事は馬震武が宗教特権を用い群衆を搾取したと指摘している。馬堅も馬震武に対する批判運動に参加した。

1958年10月、寧夏回族自治区が設立された。自治区の設立に対して、馬堅は「寧夏回族自治区人民に対する幾つかの希望」（對於寧夏回族自治区人民的幾点願望）と題する文章を書き、『中国穆斯林』1958年第12期で発表した。文章において、馬堅は馬震武を次のように批判している。

馬震武のような党、人民及び共產主義に反対する封建的地主と悪辣な権力者は、人民の共同の敵と回族のクズであるだけでなく、イスラームの背教者でもある。アッラー或いは聖者と自称する人には信仰心が欠如している。彼は悪事の限りを尽くした。我らは彼と戦い抜くべきである。我らは彼によって奴隷のように酷使された同胞を解放すべきである。彼に殺された同胞に代わって恨みを晴らすべきである。我らは人民政府に、彼の財産を全部没収し、寧夏回族自治区の発展のために利用することを求める。彼の財産は元々人民のものである。（中略）我らは馬震武が宗教の名のもとに、人民を弾圧し、搾取し、酷使し、屠殺した罪を断じて許さない（馬堅 1958b）。

馬震武について詳しくない人々にとって、中国共産党の機関紙である『人民日報』は信頼度が高いものであったため、人々は彼が恐ろしい罪を犯したことを深く信じた。馬堅の場合、反右以前から神秘主義教団のジャフリーヤ派に不満を抱いていた可能性がある。これは伝統的イスラーム神秘主義から派生した聖者崇拜などの行為を多神崇拜の邪道と考えていた、イスラーム思想改革者ムハンマド・アブドゥ（Muhammad ‘Abduh 1993a: 700–703; 1993b: 208）⁽⁸⁾に強く影響を受けていたことから推測できる。1933年、馬堅はイスラーム改革派のムハンマド・アブドゥの著作 *Risālat al-Tawhīd*（神の唯一性について）を中国語に翻訳していた。1934年、訳本は「回教哲学」と題して出版された。訳者序において、馬堅は次のように述べている。

神の唯一性の問題は回教哲学の基礎である。回教を信じる人は、勉強せねばならない。

（中略）初めてアズハル大学回教哲学院のイブラヒーム・ジャバーリー教授と会った時に、神の唯一性に関する専門本があるかと彼に尋ねた。彼はムハンマド・アブドゥ氏の『神の唯一性について』は近代において価値が一番高い著作であると言った。そのため、私は本を買い、真剣に研究した（馬堅 1934）。

また、馬堅は1932年3月10日の日記に、「晩御飯後、ムハンマド・ザフザーフィー先生の家を訪問した。最新のクルアーン注釈について先生に聞き、先生はムハンマド・アブドゥ氏によ

る注釈が一番良いと言った」と書いている。このムハンマド・ザフザーフィーとは、エジプトに來たばかりの中国からの留学生のアラビア語レベルを高めるべくアズハル大学から派遣された教員である。上述した訳者序と日記を見れば、当時のアズハル大学はムハンマド・アブドゥを尊敬し、彼の思想を推奨していたことがわかる。また、馬堅（1950a）によれば、多数の回民は貧しいため、地主階級に属する人がほばいない。預言者ムハンマドも明確に土地を賃借することを禁止したから、土地改革に反対する行為はイスラームの教義に違反している（馬堅 1950a）。したがって、馬堅は、政治的にも、宗教的にも、馬震武を肅清することは正しいと考えた。馬堅は新政権に重用されることを喜び、同族の馬震武を批判した。なお、文革収束後の1984年、馬震武が右派分子として肅清されたことは誤りであったと中共寧夏回族自治区委員会によって認定されている。

馬堅による馬震武への批判には彼にとって宗教的な合理性があった一方で、彼による親米イスラーム政権への批判の根拠は曖昧である。1958年7月19日、アラブ連合共和国とイラクは共同防衛協定に調印した。『人民日報』（1958）の社説は、この協定で、アラブ人民は帝国主義に抵抗し民族独立を守る力を増強した、と両国を称賛した。さらに、社説はイラクを攻撃しようとしている親米政権のヨルダンをアメリカの傀儡政権とし、ヨルダンを批判した。1958年8月3日、馬堅は「クルアーン読み直し」（重説古蘭經）と題する記事を『人民日報』で発表した。彼はクルアーンの啓示を引用し、アラブ連合共和国とイラクの行為がイスラームの教義に合致する一方で、トルコやパキスタンなど帝国主義に協力する国はイスラームの教義に違反していると述べている。この論調は強引に中国の外交政策に宗教的合理性をもたせようとしていると言わざるを得ない。

3. 宗教政策を宣伝するための看板となった馬堅

この時期において、馬堅は前述のようなイスラーム国家およびアラブ諸国との親善を深める外交活動に頻繁に参加した。1957年12月、馬堅は中国代表団の一員として、エジプトを訪問し、第1回アジアアフリカ人民連帯会議に出席した。1959年には、中国文化代表団の一員として、イラクを訪問した。馬堅はムスリムであり少数民族でもある。このような人物を外交代表団に参加させたことは中国の民族政策と宗教政策の良さの証拠とされ、アラブ諸国に誇示された。

1960年5月9日、毛沢東はイラク、イラン及びキプロスから中国を訪問した賓客に接見した。馬堅はアラビア語通訳としてこの会見に出席した。毛は会見で次のように来訪した外国人に伝えた。

教授、教員、科学者、文化従事者、工学者などの知識人は不可欠だ。彼らには欠点があるけれど、改造できる。今日の出席者の中に好例がある。彼だ（通訳を務めている馬堅教授を指している）。彼はムスリムだ。今年で53歳。専門はクルアーンの研究だ。今日は彼がいないと、私たちはあなたたちと交流できない。彼から離れられない。彼は預言者ムハンマドを信じている。私は信じていない。だが、私は彼と喧嘩しない。彼が信じているのは共産党でなくムハンマドだ。彼が社会主義と共産党に反対せず、社会主義と共産党を支持するのならば、構わない（熊 1995: 13）。

このエピソード内では、馬堅は中国共産党政権が宗教政策を宣伝するための看板となっている。ただし、このエピソードは彼の家族と学生によっても無上の光栄と見做され、回想録や記事など各所で書かれている。毛沢東の言い方によれば、知識人や宗教信者は無産階級や無神論者と比べれば、劣っている。ただし、思想改造や労働改造を通じ、知識人や宗教信者は自分の欠点を克服することができる。また、宗教信者は社会主義と中共を支持するのならば、改造を受けながら生活を送ることが許される。支持しなければ、敵として処理される。建国初期には、政権は知識人や宗教信者の意見を丁寧に聞き取り、彼らと話し合いながら政策を進めると言う姿を表した。だが反右などの政治運動を経て、政権はこれまで以上に自信を持つようになっていた。信条が社会主義あるいは政党による考えや要求に合致しなければ、信条に反することを選択せねばならない。さもなくば、敵と見做される。社会主義と中共を支持しているか否かに対する客観的な判断基準は存在せず、随意に解釈されうる。このような考え方は、次の段階に起こったより狂熱的な政治運動において、少数民族や宗教信者などの集団が荒唐無稽な理由で弾圧と迫害を受けた理由の一つと考えられる。



図3 1950年代中期毛沢東（左2人目）の通訳を務めている馬堅（右2人目）（中国イスラム教協会公式サイトより）

4. ブタ飼育を唱え始めた馬堅

馬堅は公的な場合において反右派闘争に積極的に参加した一方、私的な場合でこの政治運動に対する批判の意も示した。1961年、雑誌の『世界文学』が会議を行った。馬堅と学生の仲躋昆はこの会議に参加した。仲（2018）の回想によれば、馬堅は過大な会議と政治運動で大量の時間を浪費したと嘆いた。書籍の翻訳に対して、馬堅は「今、もし誰かが（自分の名義で本の）翻訳をすれば、ブルジョア思想の影響を受け名利を追求していると言われる。このようにひどく言われると、誰も翻訳しなくなる」と言った（仲 2018）。公的と私的な場合において、異なる態度を表す状況は、大躍進運動期に入っても見られる。

1958年5月、中共は15年を使いイギリスの農工業生産指標を追い越すという目標を定めた。その後、客観的事実と予測を無視し、速度と量だけを重視する無謀な生産活動が社会の各領域で展開された。1960年4月に行われた全人代の会議で、代表としての馬堅は大躍進運動に関して次のように発言した。

3人の副首相の報告は雄弁に社会主義の優越性を証明し、総路線、大躍進及び人民公社運動の正確性も証明した（馬堅 1960）。

このように公的な場面では馬堅は大躍進運動を支持する意を表した。ただし、全人代と比べれば、私的な場合と言える北京大学アラビア語専攻において、馬堅は違う態度を示した。仲（2018）の回想によれば、当時の北京大学アラビア語専攻の教員と学生も狂熱的な社会の雰囲気の影響を受け、様々なアラビア語・中国語辞書を作ることや数冊の小説を翻訳するなどの目標を打ち出した。そのための企画会議も数回催された。教員と学生たちはあれこれと気ままに想像した。だが、アラビア語専攻の教育研究室主任としての馬堅は、このような会議において黙ったり反対したりして教員と学生たちを失望させた。結局、「革命師弟」の不満を買い、「守旧派」（老保守）、「時代遅れ」（跟不上潮流）、「空気を読まない」（認不清形勢、不

合時宜)と思われた(仲 2018)。

1957年7月に催された第1期全人代第4回会議で、代表の馬堅は「回族人民は永遠に共産党と共に」(回族人民永遠跟著共産党走)と題する発言をした。馬堅(1957)は回族の政治、経済及び文化の発展状況を回顧し、共産党と政府による民族援助政策を称賛した。また、彼は一部の企業や政府機関などの部署が回族の慣習を無視していること及び雲南における社会主義改造運動が回族の特殊な状況は無視しているなどの現象を批判した。さらに、漢化している回族幹部について彼は次のように言った。

一部の回族幹部は回族民衆を導いて前進すること及び自民族の慣習と宗教信仰を尊重することに対して愚かな観念を持っている。また、一部の漢族指導者と幹部は無意識或いは故意に回族の特徴を無視し、回族を漢化することに励み、回族幹部に正しくない観念を与えている。回族幹部は一面的に回族の慣習と禁忌を無視することが進歩的な行為と見做し、回族の特殊な要求を重視することは後進的な行為と考えている。結局、回族民衆は彼らに対して失望した。回族幹部にあるべき役割はうまく果たされず、回族民衆の党への不満と離反を引き起こした(馬堅 1957)。

この時期、反右派闘争はまだ社会に広く深い影響を与えておらず、反右派闘争が始まる前の幹部の不合理な行為を批判する雰囲気は残っていた。そのため、馬堅は敢えて回族民衆を代表し彼らの利益を大会で求めた。ただし、1960年3月30日から4月10日までの第2期全人代第2回会議における馬堅の発言には共産党と政府による民族援助政策の称賛と大躍進などの社会運動に対する称賛しかない。1957において回族の慣習を尊重すべきだと唱えた馬堅は、1960年に入ると、次のような発言をした。

新疆ウイグル自治区、寧夏回族自治区及び各回族自治州と回族自治区には、人数が異なるが少数の漢族民衆はいる。積極的にウマ、ヒツジ、ロバ、トリ、カモ、ガチョウ、ウサギなどの家畜及び家禽の飼育事業を発展させるほかに、ブタの大規模飼育事業に従事する漢族同胞を奨励すべきである。彼らの肉に対する需要問題を解決するためである。このようにしてこそ、各民族の結束と1960年の国民経済計画を実現できる。

回族の集住地域で積極的にブタを大規模に飼育するということは回族の慣習を尊重する行為と言い難い。馬堅による1960年の発言は1957年の発言と矛盾している。大躍進を実現するために、言い換えれば、社会主義を発展させるために、ブタを飼育すべきである。ブタの飼育が社会主義への忠誠の試金石となった。この政策に反対すれば、敵と見做され粛清される。このような雰囲気において、弾圧されたくない人はブタ飼育政策に従わなければならない。弾圧を受けないために馬堅は回族の集住地域でのブタ飼育を唱え始めなければならないとした。ただし、彼の発言によれば、ブタを養う主体は「漢族同胞」に限る。この限定は馬堅による回族及びムスリムの最後の尊厳を守ろうとする試みである。

V 馬堅の蹉跌、再起及び病死

1. 三つのアイデンティティが招いた不幸(1966~1976年)

1966年、当時の中共指導者はブルジョアの代理人が党と政府に潜り込んで政権を奪おうとしているのではないかと疑い、資本主義が中国に復活することを防ぐため、文化大革命(以下:

文革)を発動した。中国歴史上における未曾有の政治的狂熱は知識人、少数民族及び宗教信仰者などの集団に非人道的な災禍をもたらした。馬堅もこの災禍を免れなかった。

1966年初頭、研修を受けるためにカイロに渡っていた北京大学アラビア語専攻の若手教員、鄒裕池は馬堅に宛ててアラビア語の手紙を送った。手紙では、鄒裕池はカイロの感想、馬堅のサポートへの感謝及び真剣に勉強する決意を表している。同年、アラビア語専攻の教育研究室会議で馬堅がこの手紙に言及したところ、同僚の1人が鄒裕池から学びたいという名目でこの手紙を借りていった。1966年4月24日、この人も手紙を書き、鄒裕池に送った。この手紙で、この人は鄒裕池の手紙がブルジョア専門家の後継者から先輩へ送った伺書であると述べている。また、彼は馬堅が典型的なブルジョア専門家と狂熱的なイスラームの伝道者であるため、馬堅が教育研究室の革命化に対する最大な障碍であると批判している。1966年6月、鄒裕池の手紙は壁新聞(大字報)の形で北京大学に展示された。馬堅は「深く潜り込んでいるブルジョア代理人」として、「革命師弟」から攻撃を受け始めた。彼の家は2回の捜査を受け、本と手稿も含まれる、家にある一部の財産は没収された。馬堅は「反動的な学術権威」(反動学術権威)として、街を引き回されたり、批判会議で批判を受けたりした。

馬堅は文革の前に大量のイスラームに関する文章と著作を発表していた。文革に入るとこれらの業績は彼が狂熱的なイスラームの伝道者であることの証拠になった。ただし、イスラームが馬堅に招いた災禍はこれに限らない。1968年8月から、馬堅はイーマーニ²⁹党の精神的指導者として調査され始めた。中共の現在の公式見解によれば、イーマーニ党事件は冤罪事件である(戴2004: 279-341)。文革において、四人組は、秘密裡に共産党に対抗する組織としてイーマーニ党を設立し、回教国家を建てることを企んだという罪名で、丁鉄石と彼の家族を迫害した。イーマーニ党の一人の指導者が馬堅を訪ねたことがあると言ったため、馬堅も疑われることとなった。当時、北京の宣武区に野菜を販売していた行商人が自分がイーマーニ党の低級幹部であり、高級幹部に伴い馬堅の家に行ったことがあると告白した。「特別捜査班」は行商人の罪を問わないことを交換条件とし、行商人に彼が馬堅をイーマーニ党に加入させたことを自白させた。ただし、証拠不十分のため、調査は行き詰まった。

1970年、授業を行えない馬堅は、東洋語専攻(東方語文学系)がある建物の清掃員、鍵保管員及び新聞配達員になった。その時の馬堅はすでに数多くの病を患っていた。毎日注射を受け、薬を飲んでいて、1972年、外交活動のため、毛沢東はある国の状況を知る必要に迫られ、当該国を紹介する本を探した。だが必要な書籍がなかったため、毛は世界各国の現状を紹介する本を翻訳するように指示した。このために集められた書籍の中に、2冊のアラビア語の本があり、『アラビア半島』(アラ伯半島)と題する本の翻訳が馬堅の任務となった。1974年、翻訳が完成した。

こうした馬堅の貢献にもかかわらず、馬堅の故郷の沙甸の回族民衆は、当地の政権との衝突がエスカレートしていた。文革によって、各地のモスクが閉鎖されていた。文革初期から、当地の一部回族民衆は政権によるモスクの閉鎖と宗教への不敬に対して抗議していたが、問題は解決されていなかった。1974年には、流血衝突が多発した。1975年7月29日、中央の命令を受けた軍隊は「反乱鎮圧」の名義で、砲撃などの手段を使用して沙甸を攻撃し始めた。この事件による回族の死者数は1600人を超えた(馬紹美1989)。李振中(2000: 245-247)によれば、その時期、多くの人が沙甸の問題のため馬堅を訪ねた。馬堅は来訪者に対して問題があれば相談の形で解



図4 晩年の馬堅(穆斯林在線より)

決し、騒動を起こさないように勧めた。また、政権に対して、馬堅は問題を解決するために、全面的かつ正しく党の民族政策と宗教政策を講じなければならないと助言した。政権は民族平等と信教自由を重視すべきであるというのである。けれども、政権は馬堅の助言を無視し、軍隊を派遣した。沙旬事件が起こった後、馬堅も政権に非難された。馬堅の継母、長妹及び姪もこの事件の犠牲となった。

文革に入ってから、馬堅の最初の罪は他の漢族知識人と同様に「反動的な学術権威」である。その時、馬堅に批判を招いたのは彼のアラビア語教授としてのアイデンティティである。また、彼に対する同僚の批判には、「狂熱的なイスラーム伝道者」という表現もある。つまり、馬堅のムスリムのアイデンティティも標的になった。イーマーニ党事件について馬堅に対する調査は彼のムスリムのアイデンティティと緊密に関わっている。馬堅はムスリムであり、イスラームの教義などに対して多数の研究結果を発表した高名なイスラーム学者でもある。したがって、彼は単純なイスラーム研究者あるいはムスリムだけでなく、多くのムスリムによって宗教指導者（アホン）と同等視された。沙旬事件において、馬堅は数多くの人の訪問を受け、回族民衆と政権両方へ助言した。この理由は馬堅が宗教指導者のような地位にあったためだけではなく、彼も沙旬の回族の一員であるからであった。つまり、馬堅が遭遇した災禍は、世俗的知識人、ムスリム知識人及び沙旬の回族という三つのアイデンティティが招いたことである。

2. イスラーム及び毛沢東とのつながりによって編まれた命綱

文革期には、数多くの知識人が侮辱に堪えきれず自殺した。また、数多くの宗教指導者が冤罪のために殺された。しかし、馬堅は自殺せず、また殺されもしなかった。

馬堅がイーマーニ党事件のために調査されているとき、「特別捜査班」は彼が侮辱に堪えきれずあるいは裁きを恐れ自殺することを防ぐ措置を取ろうとした。「特別捜査班」の考えを知った馬堅は、「心配しないでください。真のムスリムは自殺しない。やましいことをしなかったもので、恐れることもない」と返事をした（李振中 2000: 220）。クルアーンの第4章第29節は次のとおりである。「また、おまえたち自身を殺してはならない」（中田 2014: 112）。1952年に出版されたクルアーンの中国語訳にはこの一節に対する馬堅の注釈が含まれている。注釈の一部は次のようである。

信者は辛抱強く頑張るべきである。苦境を忍び、アッラーの御援助を待つべきである。自殺すべきではない。自殺は自分の気が弱くアッラーに対して絶望したことを意味するからである（馬堅 1952）。

また、1950年馬堅がムスリムからの質問に答える文章で、イスラームの忍耐に対して見解を次のように述べている。

困難と危険を恐れず、速さを求めず、不幸があっても失敗しても、この失敗はよい時機ではなかった或いは方法がよくないということによる結果だと信じる。これこそ忍耐の意味である。（中略）忍耐は意気消沈ではなく、奮闘と勉強である。その中に悲観の意味はない（馬堅 1950c）。

文革中の馬堅は自殺しないどころか、自分に対するまちがった批判には反抗した。例えば、批判会で一部の人が馬堅は共産党と毛主席に反対していると述べた。馬堅は即座に「私は一貫して共産党と毛主席を支持している。私が書いた文章が証拠である。毛主席は私と彼がうまく

協力したとおっしゃった。この協力に対して、お前らはなぜ誹謗中傷するか。毛主席に反対する人は一体私なのか、お前らか」と反論した（李振中 2000: 217）。馬堅の伝記には彼が反論したり相手を困らせたりするエピソードも少なくない。このような行為はまさしくイスラームの教えに従っている。馬堅が殺されることなく、時には強気に対抗できたのは、毛沢東からの好感によると思われる。

建国初期、馬堅は「ムハンマドの宝剣」及び「なぜ回民がブタ肉を食べないか」という2本の文章を書いた。毛沢東の秘書の胡喬木は北京大学教授の季羨林を訪ねた際、「毛さんはこの2本の文章が非常に気に入りました。馬堅教授に伝えてください」と言った（曹 1996: 67）。また、馬堅は毛沢東の通訳を数回務めた。前述したように、建国初期において馬堅の文章は毛沢東から好評を受け、反右派闘争時期において毛沢東は馬堅との協力を高く評価した。文革中、毛沢東は既に神格化されており、その一言一行は大きな影響力を持っていた。そのため、毛沢東からの好評は馬堅が批判に対処し、自分を守るための有力な論拠となったと考えられる。

文革初期の馬堅は有力者から突如「犯罪者」になった。馬堅の息子によれば、馬堅が1968年に書いた反省書はその時の馬堅が絶望の淵に立っていたと示唆している（馬志学 2019）。文革後期に入ってから、粛清された馬堅は再び役割を果たす機会を得た。本の翻訳は、高水準のアラビア語を国のために使う機会を彼に与えた。また、沙甸事件は馬堅が重要な仲介役を果たす機会を彼に提供した。馬堅は再び回族の利益と国家の安定のために努力し始めた。しかし、馬堅の前に現れたのは平和ではなく、自分の家族も含む故郷の回族同胞の死であった。

3. 馬堅の再起及び病死（1977～1978年）

1976年、毛沢東の死去及び四人組の逮捕に伴い、狂熱的な文革はついに終結した。1977年冬、馬堅は再度クluanの中国語訳の校正に没頭し始めた。1978年年初、中国社会科学院宗教研究所に行われた座談会において、馬堅は「宗教は人民の阿片であるというマルクスの著作にある一言だけで、宗教を全面的に否定することをすべきではない。また、宗教批判を宗教研究の代替手段として使うことをすべきではない」と発言した（馬堅著訳文集編委会 2019）。1978年3月、健康状態がおもわしくないにも関わらず、馬堅は第5期全人代第1回会議に出席し、「晩年を祖国の文化教育事業に捧げる」（把晩年獻給祖國的文化教育事業）と題する発言をした。発言は建国初期に定められた民族平等政策と毛沢東を称賛し、四人組が党の民族政策や宗教政策などの政策に違反した行為を批判している。つまり、馬堅は公式見解に従い、政治運動に招かれた少数民族と宗教信仰者への迫害を単純に四人組の責任とした。1978年8月16日朝2時頃、持病が悪化し、馬堅は世を辞した。

VI 終わりに：政権協力という策略の破綻

20世紀初頭、マイノリティとしての中国ムスリム知識人の一部は、社会ダーウィン主義及びナショナリズムが蔓延している中国社会において生き残るために、ムスリムを国民思想と国民意識に統合し、積極的政治参加の道を選んだ。このような背景の中で、馬堅はイスラーム新式教育を受け、立派なムスリム知識人として成長した。中国が建国して以来、馬堅は中共政権に積極的に協力し、イスラームと西欧近代主義を同時に教える教育を中国に設立しようとし、回族に向かつては愛国主義や民族団結を呼びかけた。

漢族主導の無神論社会において、イスラーム教育を円滑に実施するために、馬堅はイスラーム知識を重視し信仰と実践を強調しない戦略を採用した。イスラームを主導価値観に合致させるために、中共が頻繁に使用する革命専門用語を用い、イスラームを革命宗教と解釈した。つまり、生き残ることを目的とし、自分の一部の個性を抹殺することを通じて主流に接近するという戦略である。主流に迎合しようとするれば、馬震武のような頑固に自分の信仰の個性を保とうとする人を批判しなければならず、ブタ飼育事業も支持しられなかった。

一方、中共政権は国民党の唱えた五族共和の欺瞞を告発し大漢族主義に反対することを標榜したが、マジヨリティによるマイノリティへの不信感は解消されていなかった。反右派闘争及び文化大革命などの仮想敵を作った政治運動において民族慣習あるいは信仰を保っている、すなわち漢族化されない回族や、無神論に改宗しない宗教信仰者は容易にスパイや敵と見做された。

ムスリムを中華民族に統合し、政権協力を通じてムスリムを生き残らせるという方策に対して、現実はそのような生き残るための姿勢を許さなかった。実際、馬堅が天寿を全うできたのは、毛沢東の通訳という身分があったからにすぎない。中国社会のムスリムにとって、自分たちを国民思想と国民意識のもとに統合することが政権と協力することであると理解して実践する結果は、同化されることにほかならなかった。

付記 本稿を執筆するにあたり、深尾葉子先生と松本ますみ先生には貴重なご意見をいただいた。この場を借りて謝意を表する。

注

- (1) 毛沢東が1976年9月9日に没したものの、毛時代は1978年まで終わっていなかったと思われる。1977年2月7日、新聞の『人民日報』と『解放軍報』及び雑誌の『紅旗』は華国鋒の考えに従い、共同社説で「すべての毛主席の決定は我々が断固に擁護しなければならず、すべての毛主席の指示には我々が一貫して従わなければならない」という政治標語を発表した。この政治標語は「二つのすべて」と呼ばれている。1978年の中国共産党第11期中央委員会第3回全体会議において、「二つのすべて」は徹底的に否定された。それまで、毛の決定と指示は依然として中国を強く影響していたため、本論は毛沢東時代を1949年から1978年までの時期と定義している。
- (2) 『中国統計年鑑2021』によれば、2020年時点人口1137.7918万人。漢語を話すムスリムで、中国全土に散らばって居住している。中華民国時代は「回民」、「回回」と呼ばれた。回族とは、中華人民共和国以降の正式民族名称である。本論では「回族」を使用する。歴史的文書等では「回民」という表記が見られるが、当時の状況を尊重しそのまま記載する。
- (3) アホン（阿訇）とは回族の宗教職能者である（澤井2002）。
- (4) 会議によって臨時憲法となる「中国人民政治協商会議共同綱領」（略称：共同綱領）が採択された。
- (5) 「共同綱領」は人民政協の活動目標及び国家の基本的政策を定めたとともに、国家の性格、社会構造及び基本権利・義務も定めた（土岐1984）。「共同綱領」の第6章「民族政策」に



図5 1983年の馬堅の墓（右から：妻の馬存真、友人の白寿彝父子、学生の林松（中国イスラーム教協会公式サイトより）

は「中国の各民族は平等であり、狭隘な民族主義に反対すべきである」、「少数民族の集住地域には民族区域自治を行うべきである」及び「各少数民族には自分の慣習と宗教信仰を保つ或いは改革する自由がある」などの条項がある。「民族政策」部分は少数民族が宗教を信じることを保障している一方、信じないことも保障している。即ち、民族と宗教は区別されている。

(6) アメリカに対抗し、北朝鮮を支持する。

(7) 共産党が第二次国共内戦で勝利し、中国を建国したことを意味している。

(8) 紙幅の都合上、多神崇拝に対するムハンマド・アブドゥの意見については、Linnhoff による *Associating' with God in Islamic thought: a comparative study of Muslim interpretations of shirk* の第 5 章を参照されたい。

(9) イーマーニ (imāni) は信仰を意味する。

引用・参考文献

欧文文献

Matsumoto, Masumi 2002 "Sino-Muslims' Identity and Thoughts during the Anti-Japanese War: Impact of the Middle East on Islamic Revival and Reform in China," In *Annals of Japan Association for Middle East Studies*, 18(2): pp. 39-54.

—— 2006 "Rationalizing Patriotism Among Muslim Chinese: The Impact of Middle East on the Yuehua Journal", In Stéphane A. Dudoignon et al. (eds.) *Intellectuals in the Modern Islamic Word*. London and New York. pp. 117-142.

Linnhoff, Josef 2020 *Associating' with God in Islamic thought: a comparative study of Muslim interpretations of shirk* (Doctoral Dissertation). The University of Edinburgh.

アラビア語文献

Muḥammad 'Abduḥ 1993a *al-'A 'māl al-Kāmil li-'Imām al-Shaykh Muḥammad 'Abduḥ Vol.4*. Bayrūt & al-Qāhira: Dār al-Shurūq.

—— 1993b *al-'A 'māl al-Kāmil li-'Imām al-Shaykh Muḥammad 'Abduḥ Vol.5*. Bayrūt & al-Qāhira: Dār al-Shurūq.

和文文献

澤井充生 2002 「アホン」大塚和夫等（編）『岩波イスラーム事典』岩波書店、63 頁。

—— 2011 「中華人民共和国の『宗教団体』に関する一考察：イスラーム教協会の事例」『人文学報. 社会人類学分野』（438）、35-61 頁。

土岐茂 1984 「共同綱領の憲法的性格--中国憲法史の側面からの考察」『早稲田法学会誌』（通号 34）、31-59 頁。

中田考（監修）2014 『日垂対訳クルアーン』作品社。

松本ますみ 1999 『中国民族政策の研究：清末から 1945 年までの「民族論」を中心に』多賀出版株式会社。

—— 2003 「中国のイスラーム新文化運動：ムスリム・マイノリティの生き残り戦略」小松久男／小杉泰（編）『現代イスラーム思想と政治運動』東京大学出版会、141-165 頁。

矢久保典良 2015 「日中戦争時期の中国ムスリムにとっての憲政論：一九三九—一九四〇」『史学』（84）、307-329 頁。

—— 2022 「非漢人エリートによる政治参加の試み：日中戦争終結前後の中国ムスリムの

議論を例に」『現代中国』(96)、125-137 頁。

中文文献

- 曹俊傑（編著）1996《中國二喬：胡喬木·喬冠華傳略》（南京）江蘇人民出版社。
- 戴煌 2004《胡耀邦與平反冤假錯案》（北京）中國工人出版社。
- 康樂 1958〈中國伊斯蘭教協會召開回民座談會徹底清算馬震武禍國殃教罪行〉《人民日報》1958年10月17日。
- 李松茂 2009〈20世紀50年代白壽彝關於回族史和伊斯蘭教史的研究：紀念白壽彝百年誕辰〉《回族研究》19（02）、42-44頁。
- 李振中 2000《學者的追求：馬堅傳》（銀川）寧夏人民出版社。
- 劉格平 1949〈山東回民五個月的工作總結〉中共中央統戰部（編）《民族問題文獻彙編》（北京）中共中央黨校出版社、1294-1303頁。
- 盧洪基 1951〈語無倫次的山姆大叔〉《光明日報》1951年1月10日。
- 馬堅 1932〈留埃日記選〉馬堅著譯文集編委會（編）《馬堅著譯文集》（第9卷）（北京）商務印書館出版社、213-250頁。
- 1934〈回教哲學 序一〉馬堅著譯文集編委會（編）《馬堅著譯文集》（第1卷）（北京）商務印書館出版社、155-156頁。
- 1949〈為爭取和平而奮鬥：在首都回民紀念七七大會上的演講詞〉馬堅著譯文集編委會（編）《馬堅著譯文集》（第4卷）（北京）商務印書館出版社、542-546頁。
- 1950a〈回民同胞對於新時代應有的認識〉《進步日報》1950年7月16日。
- 1950b〈回歷綱要自序〉馬堅著譯文集編委會（編）《馬堅著譯文集》（第5卷）（北京）商務印書館出版社、81-83頁。
- 1950c〈教門問答〉馬堅著譯文集編委會（編）《馬堅著譯文集》（第4卷）（北京）商務印書館出版社、547-549頁。
- 1950d〈提案第十五號〉中國人民政治協商會議全國委員會秘書處（編）《中國人民政治協商會議第一屆全國委員會第二次會議彙刊》（北京）新華書店、83-84頁。
- 1951a〈帝國主義對埃及的侵略和埃及人民的反抗〉《人民日報》1951年11月19日。
- 1951b〈回民為什麼不吃豬肉〉《人民日報》1951年3月20日。
- 1951c〈穆罕默德的寶劍〉《光明日報》1951年1月19日。
- 1951d〈支持伊朗人民反對英美帝國主義的鬥爭〉《人民日報》1951年7月28日。
- 1952〈古蘭經譯註釋〉馬堅著譯文集編委會（編）《馬堅著譯文集》（第3卷）（北京）商務印書館出版社、141頁。
- 1955〈評論老初二派、老初三派和遵經派〉馬堅著譯文集編委會（編）《馬堅著譯文集》（第5卷）（北京）商務印書館出版社、146-149頁。
- 1957〈在第一屆全國人民代表大會第四次會議上的發言 回族人民永遠跟著共產黨走 馬堅的發言〉《人民日報》1957年7月17日。
- 1958a〈重讀古蘭經〉《人民日報》1958年8月3日。
- 1958b〈對於寧夏回族自治區人民的幾點願望〉《中國穆斯林》1958（12）、13頁。
- 1960〈我國勞動人民正在做驚天動地的事業〉《人民日報》1960年4月10日。
- 馬堅／吳鴻賓 1950〈提案第三十號〉中國人民政治協商會議全國委員會秘書處（編）《中國人民政治協商會議第一屆全國委員會第二次會議彙刊》（北京）新華書店、92頁。
- 馬堅著譯文集編委會 2019〈馬堅年譜〉馬堅著譯文集編委會（編）《馬堅著譯文集》（第9卷）

- (北京) 商務印書館出版社、327-357 頁。
- 馬美忠、王春福 1986 〈回憶馬堅先生在沙甸辦學〉《中國穆斯林》1986 (02)、13-14 頁。
- 馬紹美 1989 〈沙甸事件概述〉沙甸回族史編寫組 (編) 《沙甸回族史料》(開遠) 沙甸回族史編寫組、46-57 頁。
- 馬志學 2019 〈後記二 如煙往事 似水流年〉馬堅著譯文集編委會 (編) 《馬堅著譯文集》(第 9 卷) (北京) 商務印書館出版社、434-465 頁。
- 民族問題研究会 (編) 1980 《回回民族問題》(北京) 民族出版社。
- 人民日報 1958 〈團結就是力量：祝阿聯和伊拉克共同防禦協定〉《人民日報》1958 年 7 月 21 日。
- 沙秋真 1985 《回族歷史人物故事叢書：馬堅》(銀川) 寧夏人民出版社。
- 王伏平 2001 〈西工委與回回民族問題：紀念回回民族問題出版 60 週年〉《回族研究》44、68-71 頁。
- 鄔裕池 1981 〈平生風義兼師友——憶馬堅先生〉《阿拉伯世界》1981 (6)、84-92 頁。
- 新華社 1958 〈中國回民文化協進會完成歷史任務宣告結束回民文協一屆二次擴大會議通過決議〉《人民日報》1958 年 11 月 2 日。
- 熊向暉 1995 《歷史的註腳：回憶毛澤東、周恩來及四老帥》(北京) 中共中央黨校出版社。
- 中國共產黨中央委員會 1957 〈中國共產黨中央委員會關於整風運動的指示〉《人民日報》1957 年 5 月 1 日。
- 中國人民解放軍第一野戰軍前委員 1949 〈中國人民解放軍第一野戰軍前委員對臨夏回民工作的指示〉中共中央統戰部 (編) 《民族問題文獻彙編》(北京) 中共中央黨校出版社、1257-1258 頁。
- 仲躋昆 2018 〈憶念恩師馬堅先生〉楊發明 (編) 《一生堅實：紀念馬堅先生文集》(北京) 商務印書館、50-60 頁。